

ダンスの神様

福井 雅

わたしはひとりで泣いていた。高校の裏手にある路地を歩いていたら、ひとりで涙がこぼれてきたのだ。だって、踊れないんだもの。生まれつきセンスがないのだから。どうしようもないじゃない。蟬の声がうるさかった。半袖の制服でさまようわたしの顔は涙と汗とで大変なことになっていた。気がついたら、見慣れない路地に迷いこんでいた。占い、と紫色で書かれた古い木でできた看板がかかっていて、髪の毛を紫色に染めた、あやしい老婆が入口でわたしを手招きしていた。紫ばあ、とわたしは心の中でその人にあだ名を付けた。誘いに乗って、ふらっと店の中に迷いこんでしまったわたしに、紫ばあは、黒い茶碗に入った茶色のどろどろしたせんじ薬みたいなものをすすめて、「あんたの悩み、聴かせてみな」と言った。

その、あやしげな液体を飲んだわたしは、もうなんだかたまらなくなって、見知らぬ紫ばあにすべてをうちあけてしまっていた。高校の文化祭で、クラス対抗のダンスコンテストがあること。それには、クラスの全員が出ないといけないこと。舞踏家や先生方が採点して、順位が決まること。因縁がある二組には、どうしても負けたくないこと。でも、その二組には、むちゃくちゃダンスが上手い有森エリナがいること、ひるがえってわが三組は、みんなそこそこ上手いのに、わたしだけがちゃんと踊れなくて、ブレーキになってしまっていること。どう努力して練習しても、ロボットみたいなきなになってしまっていて、絶望的であること。クラスみんなは、かまわないよ、といってなぐさめてくれてはいるけれど、本当は二組に負けたくないと思っていること。でも、どう頑張っても、ダンスがうまくならないので、本当につらいこと。

しゃべっているうちに、よけい大泣きしてしまって、どうしたらいいかわからなくなってしまう。紫ばあは、思いのほかやさしくわたしの肩を叩いて、わかったよ、と言った。

「今持っているあり金を出しな。全部だよ」

わたしは財布をひっくり返し、さらに、定期券の隙間にいざというときのたぬ

に隠しておいた千円札も出した。チャージしたICカードも出したけれど、そいつはいいよ、現ナマだけでね、と紫ばばあは言った。

「いいことを教えてやろう。だけどね、決まりがあって、あんただけじゃなくて、もう一人にも同じことを教えることになるけどね」

よくわからないまま、わたしはうなずいた。

「学校の裏手に、小さな祠があるだろう。鳥居の奥にある、あの小さな赤い祠だ」
ああ、あそこ、とわたしは思う。誰も行かないところだけれど、存在は知っている。

「あそこはね、ミヤビノカミの遠縁でさ、おどらせることにかけては天下一品なんだ。いまは、だれも参ったりしないけどね。だから、あそこへ行って、願いごとをしてみな」

そういって、紫ばばあが勢いをつけてわたしを店の外に押し出すと、どうしたことか、そこはもうわたしの知っている路地だった。かげろうがたちそうな陽射しの中をふりかえっても、紫の看板はどこにも見あたらなかった。白い光の中で、この世とあの世をつなぐような蝉しぐれの音だけが戻ってきていた。

善は急げ。われにもすがる気持ちで、わたしは祠をたずねた。そうして、お願いをした。汗をぬぐいながら、懸命に。祠からの帰り道で、なぜか、二組の有森エリナとすれ違った。小さく会釈をしたわたしに、エリナは、会釈こそ返したものの、わたしが何のためにここにきたかを知っているかのように、ふっと片方の頬で笑った。その顔は、もともとの素材が違うのよ、神頼みをしたって、私を追い越せるはずがないじゃない、ばっかじゃないの、と言っているようにわたしには見えた。

次の日、わたしはクラスの練習の最初に、昨日の話をした。そうして、あることを申し出た。ふだんなら、うそだろ、とひやかすはずの男子たちが、なぜか紫ばばあの話には茶々をいれなかった。それは、たぶん、わたしがそれだけ必死だったから。真剣にみんなに話しかけたから。「みんなも、もうあんなつらい目にはあいたくないでしょう。七組全部が体育館で踊ったあの予行演習の日、わたしがブレーキになって、会場に失笑が広がって、死ぬほど悔しい思いをして、わたしが泣き崩れたあの日みたくなりたくないでしょう。だから、聞き入れて」って、わたしは頼んだ。でも、その提案は受け入れられなかった。そのかわりに、

男子で一番ダンスが上手な竹無君が、あることを思いついて、みんなに提案した。クラスはざわついたけれど、最後には、二組には普通の方法では勝てなさそうだからやってみよう、ということ、竹無君の案のほうを採用されたのだった。

文化祭の当日。くじ引きの結果、私たち三組の出番は最後になった。その二つ前に行われた二組のパフォーマンスでは、有森エリナがもうキレッキレのダンスを披露した。圧巻だった。ライバルのわたしたちから見ても、ほれぼれするくらいだった。ああ、ダンスの神様をお願いしたんだ、とこれはわたしだけじゃなかったこと。優勝はもう二組に決まりだと、審査員の先生たちが思っていることが雰囲気を感じ取れた。観客の生徒や保護者も、そんな感じでうなずきあっていた。

いよいよわたしたち三組の出番になり、わたしが予行演習のときみたいに隅っこではなくて、中央に歩み出ると、ああ、三組はあきらめたんだな、という感じが観客席から伝わってきた。何人かが席を立てて体育館を出ていった。あきれ顔でいる生徒もいたし、三組はウケ狙いに出たかと、私をひそかに指差して笑いあっている生徒も散見された。

曲が流れ、ダンスが始まった。わたしは、わたしなりに一生懸命にひたすら練習したダンスを踊った。でも、ロボットは変わらない。たぶん、不器用で、ぶざまなまま。でも、観客席から、嘲笑は伝わってこなかった。

それは、クラスのみんなが、わたしのロボットダンスにあわせて、まったく同じ動きをしてくれていたから。ダンスのうまい久美子も、竹無君も、私に完璧にあわせてくれていた。曲が進むと、少しずつ、みんなの踊りのタイミングがずれはじめ。個々の動きは、もとの通りぎこちないまま。でも、微妙なずれが、なめらかなうねりを生みだす。不思議な視覚効果を創りだしていく。観客席から、驚きの声があがる。感嘆のため息が聞こえる。そのうち、中央の私から外側に行くに従って、ロボットが白鳥に変化していき、右端の久美子、左端の竹無君になると、完璧になめらかな生き物の動きになっていく。その途中段階を、微妙にずらしながら、クラスのみんなが変化をつけてくれている。拍手が大きくなっていくのがわかった。手拍子も起こった。もう、誰も笑わない。おおっというような感情が、会場を埋め尽くしていくのが感じられた。踊りのグラデーションは、

やがて、だんだんと収まっていく、音楽がクライマックスを迎える頃には、全員が私の動きと寸分たがわぬロボットダンスに戻っていて、最後の音と同時に、わたしたちは演技を終えた。肩で息をしながらも、表情は笑顔のまま、クラス全員がフィニッシュのポーズを決めた。終わった瞬間、観客は全員が立ち上がって、スタンディングオベーションをしてくれた。涙が出てきた。七位から順に結果が発表されて、二位は二組、とアナウンスされた瞬間、わたしたちは抱き合って喜んだ。男子も女子もかまわずに。

あの日、祠の前に立ったわたしは、ミヤビノカミゆかりのダンスの神様にこう願ったのだ。「私はこのままでいいから、どうか、クラスのみんなのダンスを上手にして下さい」と。当日、熱が出たことにして、わたしは休むつもりだった。それを次の日みんなに提案した。でも、竹無君がこう言ってくれたのだ。「クラスみんなで踊らないと意味がない。だからもし、そういう願をかけてくれたんだったら、ぼくらがきみのロボットダンスに合わせる。そこからはじめて、できるかぎりのことをやる。だから、きみは、自分なりにベストを尽くしてくれればいい」

それからは、わたしのロボットにあわせて、みんなで練習した。わたしを基準にして、その上で、変化をつけて、うねりをつけていってくれた。なんだか申し訳なくて、でも、それ以上に、みんながわたしにあわせてくれることが嬉しくて、ボロボロ泣きながら稽古した。

本当は、本番では、もしかすると、有森エリナの神がかり的なダンスを筆頭にした二組のほうが個々の演技の足し算ではうまかったのかもしれない。でも、審査員の先生方は、クラスが一心同体となって取り組んでいるわたしたちの姿を、おそらく評価して下さいなのだ。

次の日、わたしはダンスの神様にお礼参りに行った。ありがとうございます。おかげで、ものすごく大切なものを得ることができました。風が吹いて、鈴が揺れて、ダンスの神様がわたしを祝福してくれているのがわかった。帰り道、あの、紫ばああの店も探したけれど、たどりつけなかった。たぶん、何かしらの条件が整わないと、現れてはくれないのだろう。

最近、わたしに、ミヤビノカミゆかりの神様をお願いしたいことができてしまった。文化祭が終わったのに、何をお願いするのだった？ わたしは気づいて

しまったのだ。もしかして、神様がおどらせることができるのは、身体だけじゃないのかもしれないって。身体だけじゃなくって、たぶん、心も。竹無君との恋が、もしもかなえられるなら、うまくいきますように。二人が、心をおどらせることができまますようにって、お願いするつもり。だから、わたしのサイフの中には、いつ紫ばばあに出会ってもいいように、適度な現金が入っている。 了